闇夜の対妖伝【陰】

神の末席

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇夜の対妖伝【陰】

【Ｎコード】
Ｎ８６２６Ｍ

【作者名】
神の末席

【あらすじ】
霊能力者の名家、法印一族の嫡子である少年・貉が送る、爽快妖怪バトルファンタジー。

序章（前書き）

キャラ紹介・其ノ壱

貉（１６歳）

主人公。法印一族本家の嫡子で、生まれつき高い霊力を持つが、性格が大雑把なせいで霊力のコントロールが雑。

序章

「……なんでこんな事になっちまったんだろうなぁ」

麓霊山の中腹で、法印　貉（ホウイン・ムジナ）は、今の現状に盛大なため息と共に言葉を吐き出した。

「…それは貉がどうしようもなく間抜けで軽率だからです」

傍らにいる女、水華（スイカ）からは、冷たい口調が突き刺さる。

それに対して、貉は目を据わらせた。

「けどよ水華。今回のこれは俺のせいか？」

よく見れば二人は泥だらけで土に身体を沈めていた。水華に至っては、首から下が地面に埋まっている。

「……では、誰の責任であると？」

「あーもう！はいはい、俺ですよ！俺のせいですよ畜生っ！」

低い位置から睨まれ、丑の刻過ぎの夜闇の中、貉はもうヤケクソになって喚いた。

…数分前、

巨大な蟒蛇がぐわっとアギトを開いて突進してくる。妖怪と死闘の真っ最中だっだ。

蟒蛇の突進を二人は跳躍してかわす。

「六花・封縛！」

跳躍した水華が空中から縛魔術を放つ。

霊力が生み出した蔓が、蟒蛇を地面に縫い付けた。

水華が動きを封じたところを、貉が腰から刀を抜き放ち、蟒蛇に向かって一直線に落下する。

「我が御手に地脈の力…」

真言を紡ぎ、刀に術式を乗せると、蟒蛇の額に怒号と共に振り下ろした。

「だぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

刀から黄色い波動からあふれ、振りかざされた刀身は蟒蛇の頭を両断した。

――…土ノ式・断絶斬

陰陽五行の土の力を刀に上乗せした刀術だ。

水の性を持つ蟒蛇にとって、土の術は相剋。つまり弱点だ。

術で額から顎まで両断された蟒蛇は、ピクピクと痙攣したまま動かなくなった。

しかし……

「っ……！？」

「地面が…！！」

ズズズ……と地面が揺れ始めたかと思うと、突如、ボコッと沈んだ。
貉の術が強すぎたのと、地下に蛇の巣穴となっていた空洞があった事が災いして、ちょっとした地盤沈下が起きた。

ちょうど二人の真下で。

「「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」」

二人は投げ出されるように土砂の波に呑み込まれた。

…で、現在に至る。

土に埋まったままの状態で、水華は辟易した様子。

「…あなたは何でいつもこうなのですか。だいたい、相手は蛇なんですから、地下に空洞がある事ぐらい考慮できるハズですよ」

「…あんまり生意気ぬかすと、引き上げてやらんぞ」

確かに水華は首から下が地面に埋まっている。自力で脱出するのは難しいだろう。

だが、当の水華は涼しい顔で「ご心配なく」と言うと…

「……破っ！」

「うおっ！」

水華は身体から霊力を爆発させ、周りの土を吹き飛ばした。
余波を受けた貉が吹き飛ばされて転がる。

「水華、てめぇ何しやがる！」

「……」

地面に屈伏している貉が怒鳴り付けるが、水華は全くもって応える様子もなく、涼しい顔で受け流して、土から出た。

「…もう戻りましょう。あまり遅くなると明日が辛いです」

「…聞けよ」

貉の呟きを無視して、水華はそそくさと立ち去った。

第一章　異変（前書き）

人物紹介　其ノ弐

水華（スイカ）　（15）

法印家の霊能者。貉とは従妹に当たる。
縛魔術や探知術に長けるが、退魔法が苦手。冷静沈着で現実主義。

第一章　異変

現代。

妖怪と聞けば、大抵の人は『昔の』存在と思うだろう。
確かに、戦国時代や平安時代は特に、無数の妖怪が跳梁跋扈していた。
その当時が、最も妖怪の活動が全盛期だったのは事実である。

だが、実は現代にも妖怪は存在する。

そもそも妖怪とは、悪意や怨念が具体化したモノがほとんど。
全てがそういう訳ではないが…

だからこそ、政治や経済なんかでドロドロになっている現代もワリと妖怪は多い。

よって、昔ほど表立たないが、妖怪を祓う霊能者は、意外に必要とされている。
我らが法印家も、実はある政治家のお抱えになっている。
全く不愉快な話であるが。

……翌朝

「ふぁ～……眠いぃ」

貉は目をショボショボさせて、フラフラと学校への道のりを歩いていた。

少し後ろに同行してる水華も、無表情ながら眠そ…

「Ｚｚｚ…」

……いや、歩きながら寝ていた。どんな特殊能力だ。

羨ましい。

なんかもう怨めがましい目で水華を睨んでると、級友が背中を叩いて現れた。

「おはよう、法印！」

「……ああ、山門か。おはよう」

山門亮（ヤマト・リョウ）。

貉のクラスメイトであり、貉や水華と同様、霊能者である。

「おいおい、気の抜けた返事だな。今日は卒業式だってのに」

「昨夜に死闘を繰り広げ、その上一時間しか寝ていないんだ。これで元気なヤツがいたら人間か疑うね」

「そうか？宗次さんは三日三晩、妖怪の群れとやり合った次の日にも、いつも通りケロリとしていたぜ？」

宗次とは、法印　宗次（ホウイン・ソウジ）。

現在の法印家当主で、貉の師でもあり、祖父に当たる。

「…あのジジイと一緒にするな。あれは人間では無く、怪物の部類

だ」

「ハハハッ！あの生きながらにして伝説と言われた陰陽師を、ジジイ呼ばわりか！」

ムスッと不機嫌そうな顔をする貉に、軽薄に笑いかける亮。
確かに、人間性はともかく、霊能者としての実力は、貉も認める。
もう齢百近い年齢にも関わらず、日夜、世界中を飛び回って妖怪を修祓しているのだから。

しかし、だから腹が立つ
あんなのが最強の霊能者だなんて、貉は認めたくない。

「あーあ、それにしても何なんだ。とうとう俺たちも卒業か」

しみじみ頷く級友に、貉は眉をしかめた。

「なんだよ、急に」

「…いや、あと数時間で級友が旧友になるんだと思ってなぁ」

そんな事を言い合いながら登校して行った。

――…

卒業式は無事に終了した

同級生たちが泣き別れしたり、励まし合ったりする中。

「わからないね」

一歩外れた位置にいる貉が呟いた。

「ただの卒業式で、なぜそこまで感情的になれるのかね。別に二度と会えなくなるわけじゃないのにさ」

会いたくなれば、会いに行けばいい。

そう思った矢先、不意に背後から男の声がした。

「そんな事を言うものではない」

「！？」

勢いよく振り返ると、三十代後半の、黒スーツを着た荘厳な男がいた。

「てめぇ……なんでここにいる！ここは中学校だぞ！」

「卒業式に父親が来ていて何が悪い…？」

「てめぇが保護者ってツラかよ！ヤクザやマフィアの方がしっくりくる！」

確かに、この男を見ればそういう印象を受ける。

この男の名は、法印　葛（ホウイン・カズラ）。

貉の父親であり、法印家をお抱えにしている政治家のボディガード

をやっている。

「……まぁいい。とうとうお前も、中学を卒業した訳だ。霊能者として一人前に認められる」

「ふん…」

一見、祝いの言葉に聞こえるが、この男が言いたい事は『次期当主候補になる権利ができた』という事だ。法印家は、義務教育を終えると、その権利が与えられる。

貉には興味ない話。

しかし、法印家の宗家である貉は、今年から、当主決定の会議に参加しなければならない。

この父親は、我が子が自分の味方をすると考えてるのだろう。

大して影響力があるとは思えないが…

「それじゃ、仕事があるので失礼する」

それだけ言い残すと、葛は音も無く姿を消した。

その代わりに、一枚の人型の紙がヒラヒラと宙を舞っていた。

「あの野郎……仕事場から式神を飛ばしたのか！」

―……―……

「……何…？」

卒業式の帰り、一人で路地を歩く水華は、何か異変を感じた。

妖気だ。

それも極めて強力な…

ここから距離がある場所だが、確かに感じ取った。

しかも、隠す様子はなく、むしろ見つけてもらう事を意図して、わざと垂れ流している。

「性質は火……か」

恐らく罠だ。

だが、放っておく訳にもいかない。

それに、この妖気なら、他の霊能者も気づくだろう。

「……」

手元にある和紙で式神を造り、法印家の邸に飛ばすと、妖気の発信源に向かった。

第二章　焔の災厄（前書き）

人物紹介　其ノ参

法印　葛　（３９歳）
《ホウイン・カズラ》

貉の父。厳格で油断がない性格で、実戦経験が豊富。法印家の次期当主の座を狙っている。

第二章　焔の災厄

術で筋力を強化して、建物の屋根の上を跳躍しながら、妖気の流れてくる方へ向かう水華。
近づくにつれ、妖気が鋭さを増して、ピリピリと肌で感じ取れる。

だが、おかしい。

自分の速度以上に、妖気が近付いている。

（…これは……あっちが近付いてきてるのか？）

なら、狙いは自分の可能性が高い。
普通なら、抵抗力の少ない従人（※普通の人）を狙うハズだが、強い妖怪は、強い力を求め、高い霊力を持つ人間を喰らうモノもいる。

「……ならば…」

と、水華は進路を変えた。
案の定、妖怪もこちらへ来る。

町を外れ、山の梺にある神社に着地した。

妖怪がたどり着くまで、あと一分ほどか……

「単身での戦いは、あまり得意ではないのですが……贅沢言ってはいけませんね」

―……―…

「……なんだ？」

役所勤務の中、同じ異変を葛も感じ取っていた。

妖気……しかし、何かおかしなモノが、微かに混じっている。

この微量の気配に気付いたのは、優秀な熟練者である葛だからだろう。

恐らく、貉や水華……他の霊能者で気づいた者は少ない。

「どうした…葛」

今の声は部屋の奥に座っている初老の男だ。

荘厳な顔立ちにヒゲを蓄え、葛以上に厳格な目付きは自信に満ちている。着ているスーツも高級ブランドのモノだ。

梶木　慧斗（カジキ・ケイト）。法印家を抱える国会議員である。

「町の外れ……西の山の方角から強い妖気を感じます」

「そんなもの他のヤツに任せておけ。貴様はワシを護っておればよい」

危険が迫っているにも関わらず、慧斗は即座に言い放つ。

「何のための法印家だ。貴様以外にも、霊能者はいるだろう？貴様の手駒で対処すればよい」

葛は無表情を保ちながら、心の中で舌打ちした。

（……素人め）

妖怪退治はそんなに甘くない。

だが、この男に逆らう事はできない。

「……では、そのように」

葛はそう言うと、携帯を取り出して連絡を取った。

―……―……

「……来た」

神社の一角。

水華は空を見上げた。

黒い影が風を流れるようにやってくる。

「……ホゥ」

妖怪は水華の姿を認めると、感嘆した声を上げて、地面に着地した。
妖怪は犬の姿をしていた。しかし、その身体は四肢一本が水華の身長に達するほど巨大である。

水華は、ギリッと歯噛みする。

「炎を喰らう者……禍斗か…」

呟いた瞬間、ブワッと、犬の灼熱の妖気の奔流が空気を裂いた。
咄嗟に障壁を築き、妖気を遮断する。

「六花・封縛！」

水華は右手で刀印を結び、地面を通じて霊力で縛り付けようとした。
…が、妖怪はいきり立ち、咆哮と共に妖気を拡散させ呪縛術を霧散させた。

「…！！？」

自分の術を容易く破られた事に驚愕する水華。
その隙を突くように、妖怪は牙を紅く輝かせて口を開けた。

「っ！」

「カァッ！」

妖怪の口内から紅い閃光がほとばしった。
反射的に左へ跳んでかわす水華。しかし、その隙を妖怪は見逃さない。

グワリと顎(アギト)を開いて、水華を喰らおうとする。

「鳳仙花・風破！」

地面に転がりながらも、ポケットから呪符を取り出し、襲いかかってくる妖怪に風の刃を多方向に放つ。

術が妖怪の顔面に直撃し、ひるんだ隙に、水華は距離を取って体勢を建て直せた。

だが、今の一撃は、大して効いてるように見えない。

水華は攻撃のための術式は得意ではない。

得意である呪縛や結界が破られてる地点で、もはや打つ手は少ない。

（……相手は火の性を持ってますから、水の術式なら勝機はあるかもしれませんが…）

それも、あまり望めない。

先ほど破られた『六花・封縛』は水の縛魔術だ。

つまり水の術でも、生半可な術では破られる。

（…なら、強力な術を使うまで！）

そう考え、呪符を数枚取り出して構える。

それに応じて、妖怪も灼熱の火炎を纏って突進してきた。

「六花豊穣・渦流壁！」

予定通り水の術で障壁を築く。
妖気が頭から障壁に激突し、壁を食い破るように押し付けてくるが、全力で築いた障壁は、そう易々と破られない。

「六花・封縛……縛、縛、縛っ！」
障壁に突っ込む妖怪に、強い念を込めた縛魔術を三重に放つ。
水気の網に縫い止められた妖怪は、妖気を身体から撒き散らし、呪縛を振りほどこうともがく。

「世に満ちたる水の精霊……その水は全てを浄化し、清に還元する…」

結界術と縛魔術で動きを封じ込めたところで、さらに強力な術を放つための真言を紡ぐ。

「…水は黒、黒は夜、夜は空……今ひと度、月光の力を借りて除災の星定めにて圧伏せよ」

この術は、水華の使う水の術式では最強の術だ。
だが、全身全霊を込めて叩き落とさなければ成功しない。
だから、渾身の力で振り絞って叫んだ。

「…水仙花・精進烈破！」

その瞬間、空を覆う雲が竜巻のように渦巻いて一点に集約し、一本の水の槍と化して妖怪を貫いた。

「ガアァァァァァァァァァァァァァァァ…！！」

巨大な質量の槍に貫かれ、妖怪は絶叫した。
怒り狂った怒号の咆哮。
だが、妖怪が術に呑み込まれたのも一瞬。
身体から灼熱の妖気が爆散し、纏わりついた水気を、その灼熱で乾かした。

（……まずいですね）

今の術で、水華は力を使いきった。
それでなくとも、強力な術を連発して、身体に無理が生じている。
わずかに残った霊力を肉体強化に廻し、動かない身体にムチを打つ。
満身創痍の水華に、犬の妖怪は牙を剥いた。
「己ェ小娘…」今にも飛びかかってきそうな勢いで、睨め付けてきた。

「…あら、人の言葉を話せますか」

「黙レ！コノ禍斗ニ、ヨクモ傷ヲォ！」

荒い息遣いで吠える妖怪、禍斗。
今の術は確実に効いてる。
だが致命傷には及ばない。
水華の術の威力が足りなかったのだ。

「我ニ刃向カッタ事ヲソノ命ヲモッテ購エ！」

「く……！」

牙を立てて飛びかかる禍斗に、

その時だ。

林の中から、人影が飛び出した。

「…せぁっ！」

「ヌゥ…！」

襲撃者が振り下ろす刀を、禍斗は炎の障壁を築いて受け止め、妖気を爆散させて弾き返す。

襲撃者は空中で回転して、水華と禍斗の間に入るような位置に着地した。

呪言を刻まれた刀。

うなじの辺りで括った不揃いな黒髪が、風に遊ばれて宙で揺れている。

襲撃者の姿を認めた水華は、肩をすくめた。

「……良いタイミングで現れますね。貉」

「…たまたまだ。タイミングを図って登場するほどバカはやらねぇよ」

背を向けたまま、首だけ動かして言う。
そして、禍斗の方を見据える。
「……禍斗か。確か、中国の古来の、火を喰らい火災を撒き散らす犬妖。随分大物が現れたな」
「…何者ダ？」
牙を剥いて、臨戦体勢で構える禍斗が低い声で答える。
「…こいつの兄貴みたいなモンだ」
「従兄弟です。いい加減な表現はやめてください」
間髪入れずに言い放つ水華。
「……ソウカ。ナラバ貴様モ術師ダナ。喰ロウテヤル」
「俺はともかく、水華を喰うのはやめておけ。腹を壊すぞ」
「…心配ナイ。胃ハ丈夫ナ方ダ」
「なんの話をしてるのですか！」
水華のツッコミに近い絶叫を無視し、貉と禍斗が同時に動く。
「燃エヨ…」
禍斗が口を開き、紅い閃光を吐く。
迫り来る熱線を、刀の一閃で切り裂く。

そこで禍斗が地を蹴った。

貉は咄嗟に頭を低くする。頭上で風を切る音がして、禍斗が通りすぎた。

一瞬でも遅ければ、首が裂かれていただろう。

さらに空中で身体を捻って背後から突進してきた。

「退っ！」

貉の真言が障壁を築く。

禍斗は不可視の壁に阻まれ弾かれる。一転して跳ね起き、犬の身体が素早く駆けた。

キン！と、貉の刀と禍斗の爪がつばぜり合いになる。

「抵抗スルナ、ニンゲン」

「断る！」

問答と同時に、貉は左手で剣印を結んで霊力を、禍斗は口から妖気を放つ。

二つの力が衝突し、爆発が生じた。

「うわぁ…！！」

「グォォ…！！」

両者ともども爆風で吹っ飛ばされた。

木の幹に背をぶつける。

貉は口から血を吐きそうになったが、飲み込んで我慢した。今は気にしてる暇はない。

禍斗の方は地面に転がるも、跳ね起きて、貉に追撃を加えるべく突進した。

それを見た貉は、痛みで身体が動かない状況の中で、薄く笑った。

「やれ、水華！」

貉の叫びに、禍斗は驚愕して足を止めた。

だが遅い。

犬の妖は既に術中だ。

四方からほとばしる甚大な霊力が、禍斗の四肢を絡めとるのがわかった。

「コレハ……！？」

「八卦の封縛陣…」

今まで戦闘の外だった水華が呟く。放たれた術は、先ほどの水華の術の比ではない力で、禍斗の動きを完全に封じた。

「己ェッ！」

ゴゥと禍斗が妖気を爆散させた。

しかし、かけられた術はビクともしない。

「無駄だ…お前じゃこの切り札は破れないよ」

「ナゼダ。コノ術ハアノ女ノ縛魔術ノハズ……コレ程ノ霊力ヲ残シテイルトハ思エン！」

「八卦の術は、霊具を媒介にして陣を介して霊力を増強して発動する……霊力を殆んど使わない」

「霊具ダト……？ソンナガドコニ…」

そこまで言って禍斗はハッと目を剥いた。

貉の口がニヤりと笑う。

「気付いたか。この神社には大量の榊の木が植えられている。榊は神木の代表だ。他にも桃や伽羅、槐など霊力の強い木も植えてある。霊具の媒介には困らないんだよ」

「ヌゥ…」

くぐもるような声で唸り、禍斗は伏せたまま大人しくなった。

それを見計らったように、黒装束を来た人間が数人、禍斗を囲むようにして現れた。

「疾影衆…親父の部下か。なんて都合の良いタイミングで現れやがる」

「……どうやら、出てくるタイミングを見計らって待機してたみたいですね」

「なら加勢しろってんだ…」

舌打ちして、黒装束たちを睨む貉。しかし、彼らは素知らぬ顔で受け流した。

「ご苦労様です、貉様、水華様。あとは我々にお任せを」

「…チッ！良い性格してやがるな、石也！俺達が死にかけたのに、てめぇらは高みの見物か！」

紳士的な態度で言う疾影衆の筆頭・石也に、貉は悪態を吐いた。

他の疾影衆は、黒布マスクで鼻から下が隠れてるが、筆頭の石也だけは顔を露にしてるため、よくわかる。

「あの妖怪は我々では対処できませんよ…ならば足手まといにならないように、としたまでです」

「親父の命令で来たんだろう…！？なのに何も手を出さないのかよ！」

「ですから事後処理を。お二方は帰って疲れを取ってください」

「チッ…」

いつまで立っても会話が不毛なので、貉は大人しく引き下がった。

だが、帰宅直後に、貉達は驚愕する報告を受けた。

『法印葛が、射たれた』と

第三話　策謀（前書き）

更新遅くてごめんなさい。これからもまったり投稿していきますが、ご了承のほどを…

第三話　策謀

――……病室

「チッ……生きてやがったか、クソ親父」

「無事で何よりです、葛様」

貉と水華は病室に入るなり、別々の感情のこもった言葉を吐く。
上体を起こしていた蔓は、入ってきた二人に対し口を開く。

「……ふん。私はそう易々とはくたばらんよ。自慢じゃないが、しぶとさには自信がある」

「そのしぶとさを過信すると足下をすくわれるぜ」

事実、先ほどまで集中治療室に入れられ、かなり危険な状態にあった。
治療が終わり、一命を取り止めて、ようやく面談を許されたのだ。

「……葛様、いったいどういう事ですか？」

要所を省いた水華の言葉。一見、意図の分からない発言だが、それを聞いた葛の目付きが変わった。
葛のスーツには強力な防御術式がかけられており、衣服は愚か、露

出した肌や顔まで効果が及ぶ。
その防御力は並の防弾服を凌駕しており、ただの鉛弾くらいなら怪我などする事はない。
だが、葛の受けた銃弾は、その防御を破って致命傷を与えた。
ただの銃弾ではない事は明白だろう。
対して、葛は黙って胸ポケットから小さな金属の球を取り出した。
「……私の身体から取り出された弾丸だ…」
「……っ！こいつは…」
「……無茶苦茶ですね」
貉は息を呑み、水華は嫌そうな顔をして呟いた。
その弾丸には『呪解』『破魔』……といった、様々な術が多重にかけられていた。
普通、そんな事をすれば、術と術が反発したり相乗したりして、本来の効果を失う。
しかし、この弾丸は無理矢理に区切って干渉を避けているのだ。
理屈はわかるが、一歩間違えば全ての術が暴走して術者に返っていく。
水華が無茶苦茶だといったのはその点だ。
リスクが高すぎる。

「こんな芸当は私にもできん。しかもこんな弾丸を用意したという事は、狙いは梶木氏ではなく私だと言う事だ」

葛の言葉に、貉と水華は頷く。

「当然そうなるな。あの政治家を狙うなら、普通の弾丸で充分だ」

「この弾丸を使った者は、葛様のスーツに防御術式がかかってる事を知っていた……少なくとも、只者ではないですね」

「……それだけではない」

二人の見解に、葛が付け加える。

「つい先刻にお前たちが退治した妖怪……疾影衆の調べで、何者かに式を下されていたのがわかった」

「なんだと！」

「しかも霊力の質から、この弾丸に術をかけた者と同一犯の可能性が高い」

「！」

貉が愕然とした表情で、目を見張る。

妖怪に式を降ろし傘下に治めるという事は、その妖怪に術者を認めさせる必要がある。

葛のような一流の術者でも、使役にするなら小鬼のような弱い妖怪が限界。

そして、あの犬妖は文献に名を連ねるような強力な妖怪だ。
そんな妖怪を式として使役する術者なら、半端な実力ではない。

「お前たちも気をつけろ。敵の狙いがわからん以上、次にどんな事が起こるかわからん。疾影衆に弾丸から検出された霊力を逆探知させてるが、期待はできん」

「……後手に廻るのは気に入りませんね」

悔しそうに呟く水華。

だが、今は後手に廻って様子を見るしかない。

第三話　策謀（後書き）

人物紹介・呉
法印・宗次（ホウイン・ソウジ）　９９歳
現在の法印家の当主。世界でも名を馳せる霊能力者で、現役の陰陽師としては最強と言っていい実力だが、かなり変わり者。
今は世界中であちこち飛び回っている。

第四話　水面下

「どう思いますか、貉」

「どう、と言われてもなぁ……」

病室を出るなり投げかけた水華の質問に、貉は頭をかいて呟いた。

「あの禍斗に式を下したほどの術者だ。そんな芸当できるヤツ、そうそういると思えねえなぁ」

「身近にいるじゃないですか。法印家の現当主、法印宗次。あの人ならば、禍斗のような強力な妖怪でも式を降ろす事は可能なはずです」

確かに、宗次なら可能だろう。あの老人は、四聖獣の一角、玄武を従える身だ。

その力は紛れもなく本物で、並の妖怪なら片手で百体修祓できる実力はある。

古記に名を刻んでる程度の妖怪でも簡単に式を降ろせるだろう。

「じゃあ、何か？　犯人はあのジジイだってのか？」

「まさか。ただ、あのレベルの妖怪でも式を降す事は可能だと言ってるんです」

「……俺はあのジジイを人間とは認めてねぇけどな」

何せ、四国の大鬼と素手で喧嘩して圧勝したとか、悪霊相手に正座させて三時間説教して霊の方が根を上げたとか、地獄の番犬に勝手に首輪着けて手名付けて冥官に怒られたとか……そんな眉唾な話が絶えないのだ。

「第一、葛様の命を狙う理由はありません。もし身内を疑うなら、法印家次期当主候補でしょう」

水華の言う通り、その方がまだ納得がいく。
もうすぐ本家で、次期当主を決める集会がある。当主の座を狙う誰かが有力候補の一人である葛を狙うなら、動機は十分だ。

だが、貉はそれは無いと考えていた。
貉の知る限り、禍斗に式を降せる程の技量を持った術者はいない。
仮にいたとしたら、葛など敵じゃないくらいに次期候補として頭角を現してる。現状なら間違いなく次期当主になれるだろう。

（まぁ、それが問題なんだよな）

何しろ、今の当主の力が強すぎる。
もしこのまま次期当主が決まれば、宗次と比べられ、法印家の力は衰退するだろう。
宗次の圧力で他の霊能者に睨みを効かせてきた分、敵対する一家や情報通の妖怪からも叩かれる事は目に見える。

「ま、俺には関係ないか」

そこまで考えて、適当な調子で呟いた。

……――――

とあるカラオケルームの一室。
男が二人、場所と不釣り合いなスーツ姿で話し合いをしていた。

「失敗したようだな」

片方の、中年の男が口を開く。
歳は四十歳を過ぎたところだろう。スラッとした長身に彫の深い顔立ちだが眼つきが悪く、常に怒っているように見える。
だが今は、実際に腹を立ててるようだ。

「何のために、わざわざ中国から妖怪を持ってきたと思ってる。本命は愚か、ただの子供に祓われたぞ」

「問題ないよ」

怒気のある声を受け流すような発言は、反対に座る若い男。
清潔感のある髪型に涼しげな風貌を持ち、就職活動の最中のような印象を受けるだろう青年は、中年男とは違い余裕のある笑みを浮かべて、手元のジュースを飲み干しながら言葉を続ける。

「禍斗のヤツは充分やってくれたさ。大家の法印家の連中でも、注意するのはほんの一握りに過ぎない。ある程度実力のある数人を動けなくしておけば、後はなんとかなる」

「だが、次はどうする。禍斗より強力な妖怪となると、あとは…」

「蚣腹だ。ヤツを出そう」

「！？」

青年の発言に、中年男は目を剥いて声を荒げた。

「本気か！？　あれは数少ない切り札の一つだぞ！」

「その切り札の中じゃあ一番ゴミ手だろう？　出し惜しみする気もないしなー」

「くっ……」

「それに、忘れたわけじゃないだろ。あの術は一体ずつしか使えないし、お前じゃ小物一匹使役するのがやっとだ。いくらなんでも、雑魚にあの術を使うわけにはいかない。なら、強いヤツを出すしかないだろう」

確かに若い男の言うことは正しい。が、妖怪を集めたのは中年男自身だ。

こうも簡単に蓄えを消費されては、さすがに腹が立つ。

「俺の貯蓄だぞ？」

「でもお前じゃ使えない」

「集めるのにどれだけ苦労したと思ってる！」

「知らないな。だが、この日のために集めてたハズだ。今使わないでいつ使う？」

「それは……」

「決まりだな」

言葉が詰まった地点で、勝敗は決した。

中年男は頭を抱えたくなるが、若い男は気にした様子はなく、ボックスの受話器を手に取り……

「すいませーん。オレンジジュース一つ追加お願いしまーす」

「まだ飲むのか！？　貴様、俺の金銭的な貯蓄まで浪費する気じゃないだろうな！？」

ここのドリンクはフリー≪飲み放題≫だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8626m/

闇夜の対妖伝【陰】

2011年11月6日02時07分発行